

【原子力ワンプoint】広く利用されている放射線

(140) 放射線の健康影響－東京都民と福島県民で認識にズレ(その7)

前回の本コラムで予告しました通り、今回は、「健康」をテーマとしてどのような議論がなされたか？その様子を探ると同時に、東京から発信された「アップデートふくしま」声明¹の内容を紹介します。

ゆりちゃん：今回のテーマは「健康」ですね。パネリストはやっぱり越智先生ですか？

タクさん：その通りです。越智先生は、震災後に福島県相馬市に移住され、相馬中央病院内科診療科長を経て、現在は、東京慈恵会医科大学・臨床検査医学講座講師です。先生は、「福島での経験が、日本で再び起こり得る大規模災害の被害に備え、それを乗り越えていくことに役立つ」と確信されています。そして、福島の現状を、少しでも分かってもらいたいとの思いから、福島の今をわかりやすい言葉で伝えて理解を得る活動に尽力されています。

ゆりちゃん：越智先生はどのような話をされたのですか？

タクさん：先生の思いを正しく伝えるため、当日の会話をできるだけ再現してみましょう。「我々が今、これ（パネルディスカッション）をやっている目的は何だろうと考えると、福島に住んでいる人にしろ、東京に住んでいる人にしろ、その人たちが健康で幸せであれば何でもいいわけです。風評被害があろうがなかろうが、怖かろうが怖くなかろうが、それを思っている人、あるいはその周りの人が健康であればいいと思っています。そういう意味では、やっぱり、『何が健康を害しているのか？』ということ、しっかり知る必要があります」と最初に話をされました。そして、「放射能が怖い。そうしたら福島県産のものを避ける。こういう選択をする方がもちろん、福島県内にもいますし、東京にはもちろん、いらしていいと思います。ただその結果、『まあ私としては、おいしいものを食べるチャンスを逃すかな？と、ちょっと残念なところではありますが、そうじゃなくて、福島県産の野菜を避けた結果、例えば“ジャンクフード”に走るとか、そういうことをやってしまったら、その方にとって損になります。魚とか野菜を避けたことによる“肥満”とか、“糖尿病”の増加によって、発がんリスクが上がります。また、避難によるストレスで、“自殺率”が高くなり、さらに、高血圧によって“生活習慣病”のリスクが高まります。そういうものに対しての“健康被害”というものが“膨大”ですから、それを避けなくてはいけないと思います』と述べられました。

ゆりちゃん：膨大って？なんかピンとこないの、もう少し具体的に説明して下さい。

タクさん：確かに言葉だけでは「イメージ」が湧かないですね。実は、越智先生は2017年9月12日、NPO法人_国際環境経済研究所の特集「福島レポート」に、「原発事故の子どもへの健康影響(その3)：肥満」と題して記事を投稿していました。その中で、福島第一原子力発電所事故の前後（平成21年度～平成25年度）に注目して、福島県の5歳～17歳の子どもの肥満度と、その他の都道府県の子どもの肥満度の変化を比較・調査していました。表1がその結果です。越智先生の頭の中には、多分、この「表1」が浮かんでいたでしょう。「(福島県は)もともと、肥満のお子さんが多い県でしたが、(上で述べた“ジャンクフード”に加えて“運動不足”が影響していると思いますが)小学校の各学年の肥満度が突然、2012年に全国最下位

¹ 本声明は、会場参加者からの意見や事前質問を考慮して、会場で当日、ファシリテーターの開沼立命館大学准教授が発表した「宣言」に序文を付け加え、さらに、議論の基本的な軸は守りながら、発言の趣旨をわかりやすい文章に修正した内容となっている。

となり、それが3年間も続きました。この突然の肥満度の上昇が、将来的には（子供たちの）寿命を縮めるかもわかりません」と語っていました。また、「糖尿病患者の数が増えています。この方たちの平均余命がどれくらい短くなるか？計算によれば、『放射線被ばくによる余命の損失よりも数十倍高い』という結果が出ています」と現状を改善する必要性を示唆しました。ゆりちゃん、“膨大”というイメージが、少しは理解できましたか？

ゆりちゃん：最後に、「アップデートふくしま」声明の内容を紹介して下さい。

タクさん：表2を見て下さい。「アップデートふくしま」声明から抜粋したものです。ここには、①誤解や偏見を解く、②個人の不安にアプローチする、③境界線を直視する、④福島の新たな魅力を伝えるⁱⁱ、という4つの提言が記述されています。「常に変わりゆく福島のことを知り、自分自身も学び、伝え、新しい社会づくりに向かって進んでいく」という強い思いが感じられます。

(原産協会・人材育成部)

表1. 肥満者の割合：全国と福島県の比較
<http://ieei.or.jp/2017/09/special201706008/>

区 分	幼稚園	小学校						中学校			高等学校		
	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	16歳	17歳
H21年度													
全 国	2.70	4.36	5.50	7.30	8.60	9.54	9.69	10.29	8.94	8.89	10.32	9.75	9.83
福 島	4.29	7.05	9.18	9.66	15.52	11.87	14.85	12.90	11.69	10.92	16.81	13.14	14.46
順位(下位順)	7	5	3	9	1	8	2	8	5	6	7	2	4
H22年度													
全 国	2.81	4.34	5.38	7.05	8.30	9.28	9.98	9.98	8.70	8.65	10.52	9.71	9.74
福 島	4.63	5.03	6.86	8.35	11.16	11.07	13.77	14.04	12.14	10.94	14.88	11.99	12.71
順位(下位順)	3	17	13	15	8	11	2	3	4	6	1	7	2
H24年度													
全 国	2.39	4.22	5.41	6.62	8.26	8.82	9.32	9.68	8.44	7.90	9.98	9.00	9.55
福 島	4.86	9.73	9.89	13.47	13.97	14.01	14.53	12.41	9.66	11.47	13.17	9.06	14.11
順位(下位順)	1	1	1	1	1	2	2	5	16	1	5	26	1
H25年度													
全 国	2.43	4.05	5.42	6.80	8.26	9.47	9.37	9.62	8.42	7.85	9.58	9.07	9.35
福 島	4.66	7.63	8.82	11.71	12.76	16.66	14.01	13.70	13.31	11.96	15.45	12.43	14.12
順位(下位順)	2	1	3	1	2	1	2	2	1	2	1	4	1

ⁱⁱ ①～④の言葉はジャパン・フォー・サステナビリティ（JFS）記事「震災からの復興」を参照しました。

表2. 「アップデートふくしま」声明 (抜粋)

(http://josen.env.go.jp/update_fukushima/pdf/statement.pdf)

- 1 いまも福島への誤解、偏見、それに基づく差別は根深くあります。この問題を解決するために、例えば、「被曝による遺伝影響はない。安心して子どもを産めます」という科学的事実を、教育などを通して共有していくことが必要です。
- 2 一方、そういった科学的・数値的な話しだけでは解決しない問題も存在します。個人の不安にアプローチするには、互いに信頼をして学び合える顔の見える関係、集団での取り組み(集の学び)を皆で支え合っていくことも必要です。それだけではなく、国内外の様々な人に幅広く伝えていくようなアプローチも必要になっています。
- 3 同時に、福島について語る時に、様々な境界線ができていることも直視すべき課題です。東京と福島、外国人と日本人、世代間だけでなく、被災の悲しみや葛藤、様々なことを乗り越えてきた経験を持つ方と持たない方の間にも境界が存在します。そういった中で、誰もがその経験を自分事と考え、立場を超えて福島を語ることを大切にします。
- 4 さらに、福島では新たな魅力や、「新しい社会づくりのヒント」が生まれています。それは福島の外で、世界で価値を持つものでもあります。その点を積極的に伝えていくべきだと考えます。例えば、様々な立場の人への教育旅行・研修等の学びの場となるよう様々な試みをしていく、若い人が地域の未来を考える取り組みをしていくなどの知見を福島発のモデルとして発信していきます。